

## 【第9講】

### 達意の文章の作り方

明細書の文章に求められることは、「達意」の2文字に尽きます。「達意」とは、何が言いたいのかがハッキリ分かることです。しかし、それが本当に難しい。文章が上手なことで有名だった志賀直哉という文豪が「達意の文章を書きたいものだ。しかし、それが難しい」という意味のことを言っているそうですが、それほど難しい達意の文章を、どうしたら作れるのでしょうか？

そのコツは、意外と単純なことだと思います。

達意の文章を作るためには、伝えるべき内容を、書き手がハッキリと理解できていることが前提となります。ここは、文章の作り方以前の話になりますので、この講では触れません。（「言い直しは厳禁」の講が少し関係しています。）

問題は、伝えるべき内容を如何にハッキリ理解して書いても、達意の文章が書けない点にあります。このようなことが起きる理由は、人間が無意識の世界を持っているからです。順を追って説明しましょう。

始めに質問ですが、「伝えるべき内容」は、何処から出てきたのですか？

発明者であれば「自分の頭から」と答えるでしょうし、明細書を書く側の人間であれば「発明者の資料を元に、いろいろと検討した結果から」と答えます。発明者の場合は、過去に膨大な経験をしたり知識を蓄えたりして、それを背景にして発明します。発明した内容は、それだけが存在しているのではなくて、膨大な経験や知識が無意識の世界に蓄えられていて、それらと密接に結びついて存在しているのです。そうは言っても、発明者が発明を説明する場合、無意識の世界に蓄えられた知識なども含めて説明することはありません。その理由は、説明しようとしている内容が、それまでに蓄えた知識や経験などを踏まえて納得できるものであるということに気付かないからです。つまり、説明する内容は意識できている理解に過ぎず、その裏には、発明者自身にその説明を納得させた無意識の理解が存在しています。

明細書を書く側でも同じようなことが起こります。明細書を書く際には、資料を読んで、インタビューをして、更にいろいろ検討して、それら全部をひっくるめて、はじめて一つの理解に到達します。この到達した理解を文章化すると、単純な内容になってしまう場

合も多いかも知れませんが、その単純な内容の裏には、その何倍もの知識や検討事項が存在していて、それらに結びついて始めて、その理解が成立しているのです。

このように、人間が何かを理解する時には、言葉や文章で記述された意識されている理解だけでなく、無意識の世界も使って理解していることが普通です。また、無意識の世界も使っていることは、本人はほとんど気付いていません。

理解するだけなら、無意識の世界も使っていることに気付く必要はないのですが、文章を書く段になると、気付いていないことが大きな障害になります。何故なら、気付いていないことは文章に表すことができないので、無意識の世界については文章化されることは無いからです。しかし、読み手の無意識は空っぽなので、書かれた文章からでしか理解できません。その結果、「自分には自然に理解できることが読み手には理解できない。」「自分には自然なことなので、まさか読み手が理解できないことに気付けない」という何とも困った状況が発生してしまうからです。

このような困った状況を打開するためには、「書かれた文章だけから（つまり無意識の力を借りずに）何が読み取れるか。読み取れた内容が、自分の書きたかったことと一致するか」を考えるべきです。何故なら「書かれた文章だけから読み取れる内容」それこそが、読み手が文章から読み取る内容だからです。そして、文章だけから読み取れる内容が、自分の書きたい内容と一致していれば、その文章は十分に達意の文章となっています。

これに対して、一致していない場合は、何が足りないかを考えましょう。無意識では分かっているのですから、何が足りないのかに気付くのはそれほど難しいことではない筈です。足りない要素は複数個見つかる場合も珍しくは無いと思います。この作業は、言ってみれば、無意識の理解を意識の理解に引きずり出すようなものです。こうして足りない要素が見つかったら、それらを含めてもう一度、文章を書き直してみます。そして再び、書き直した文章だけから（つまり無意識の力を借りずに）何が読み取れるかを考えて、読み取れる内容が自分の書きたい内容と一致しているか否かを判断します。こうしたことを繰り返していけば、やがて達意の文章ができあがります。

これが、いつも言っている「フィードバック」です。